Development of the educational method for motivation with establishing professionalism in Students Majoring in Primary Education and Child Care I : Based on early exposure in health care professions education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大城, 亜水, 山下, 敦子, 高松, 邦彦, 中田, 康夫, OSHIRO, Tsugumi, YAMASHITA, Atsuko, TAKAMATSU, Kunihiko, NAKATA, Yasuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20608/00001197

神戸常盤大学紀要　Vol.16, pp.20－30, 2023

総説

教員・保育者養成課程における職業意識定着と動機づけのための教育方法の開発Ⅰ
― 保健医療専門職教育における早期体験実習をもとにして ―

大城　亜水[1)]　山下　敦子[1)]　高松　邦彦[2)]　中田　康夫[3)]

Development of the educational method for motivation with establishing professionalism in Students Majoring in Primary Education and Child Care I : Based on early exposure in health care professions education

Tugumi OSHIRO[1)], Atsuko YAMASHITA[1)], Kunihiko TAKAMATSU[2)], and Yasuo NAKATA[3)]

要旨

現在、教育・保育者養成校が抱える課題に、早期離職問題と４年制大学特有のリアリティ・ショックが挙げられる。これらの問題を改善していくためには、医療・看護・保健分野で取り組まれている「早期体験実習」を参考に、教育分野における早期体験実習の教育的効果を明らかにすることだと考える。

そこで、本稿は上記の教育的効果の検証に取り組む前段階として、まずは早期離職問題やリアリティ・ショックが生じる背景について、医療・看護・保健分野での文献や実践例をレビューし、新たに開発した教育方法に関して報告する。また、リアリティ・ショックについては概念整理も併せて行う。

キーワード：教育・保育者養成課程、早期離職、リアリティ・ショック、早期体験実習

Abstract

At present, the problems faced by education and childcare training schools include early turnover and reality shock peculiar to that of the four-year universities. The purpose of this study is to identify the improvements in student qualities that can be fostered by linking university classes with social contribution projects run by the university. We would like to clarify the

1）教育学部こども教育学科　2）前保健科学部診療放射線学科／現東京工業大学企画本部　3）保健科学部看護学科

educational efficacy and effectiveness of early exposure in the field of education with reference to “early exposure” being undertaken in the medical, nursing, and health fields.

Therefore, as a preliminary step to the verification of the above-mentioned educational efficacy and effectiveness, this study will delve into the background of the problem of early turnover and reality shock. In addition, the concept of reality shock will also be discussed. Thereaftern, pioneering cases of early exposure will be discussed, and the construction of an early exposure program in the Department of Childhood Education, Faculty of Education, Kobe Tokiwa University will be examined.

Key words: Students Majoring in Primary Education and Child Care, early turnover, Reality Shock, early exposured

はじめに

教育・保育者養成校が抱える課題にはさまざまなものがあるが、現在、可及的速やかに解決を図っていかなければならない課題として以下の２つが挙げられる。１つ目は、小学校教員、保育士、幼稚園教諭に共通してみられる１年以内の早期離職の増加であり、これは教育を取り巻く環境の厳しさを物語っている[1)]。２つ目は、リアリティ・ショックであり、これは早期離職の一因とも考えられている[2)]。特に４年制の教育・保育者養成校では、保育実習時にみられる４年制大学特有のリアリティ・ショックが教育上の課題となっている。４年制大学の多くは1、２年次に座学などで幅広い知識を学んでから３年次に本実習を迎えることが多いが、実習時に実習先を共有している短期大学生や専門学校生の技術力の高さを目の当たりにし、リアリティ・ショックを引き起こすケースがある。神戸常盤大学教育学部（以下、本学）も４年制の養成校であるが、本学の現状においても、本来ならばアドミッションポリシーに則り、実習に取り組むべきところを、先のリアリティ・ショックから職業意識が低下し進路を変更してしまう学生が一定数存在する。そのため、早い段階から入学前に抱く「子どもが好き」「恩師への憧れ」などの内的要因を多面的に捉えつつ、子どもの理解、保護者対応、事務処理などの技術力や専門性を高め、職業意識の定着と動機づけを図る取り組み、すなわちリアリティ・ショック対策を大学教育で講じる必要があると考える。

そこで上記の２つの課題を解決する１つの方策として、われわれは保健医療専門職教育で従前から取り組まれている「早期体験実習」を参考にすることにした。早期体験実習は、学士課程の早い時期に、仕事や学問の現場に触れさせ、将来への見通しと専門学習への動機づけをもたせる目的で導入されており、なおかつその教育上の効果も後述するようにさまざまな形で示されている。しかし、教育・保育者養成校では早期体験実習に取り組む学校はあるものの、教育的効果に関する研究は少ない[注1)]。そこで、教育・保育者養成課程において早期体験実習がもたらす効果について明らかにすることにより、学生の資質や能力の向上を図り、専門職の職業意識定着と動機づけにつながると考える。

なお、本稿では、本学の正課内の授業科目と、本学が運営する地域連携・社会貢献事業を連携させた本学独自の早期体験実習プログラム内容について検討する[注2)]。具体的には、上記の教育的効果の検証に取り組む前段階として、以下の内容を主

に論じる。まず、早期離職問題が生じる背景について掘り下げる。また、リアリティ・ショックについては概念整理を行うとともに、早期離職問題と同様、リアリティ・ショックが生じる問題背景について考察する。そして、早期体験実習に取り組む先行事例の分析を通して、本学の早期体験実習プログラムの内容について検討する。

早期離職問題とリアリティ・ショック

1．早期離職問題

周知のように、現代の日本において少子化対策のカギを握る子育て支援は最重要課題になっている。一方、その主な担い手である教育者や保育者の人材不足が深刻であり、就職してすぐに即戦力として求められる状況である。その結果、保育教育現場で求められる実際と養成校時代の職業意識との乖離に直面し、早期退職という選択をすることとなる。

実際に、小学校教員について、文部科学省「学校教員統計調査」によると、2004年度の30歳未満の教諭（講師を除く）の離職者は406人であるのに対し、2019年度では1,054人と約2.6倍に増加している。30歳未満の教諭の離職の理由で最も多いのが「病気」で194件であり、うち「精神疾患」は178件である[3)]。小橋は、教員の早期離職の要因を「『学校・学習不適応感』、『保護者との人間関係』で小学校教師の方が中学校教師よりストレッサーを強く感じる」としている[4)]。また、松永らは、新任教員のリアリティ・ショック要因尺度を作成し、ストレス反応との関連を調べている。その結果、「『ミスを過度に気にする傾向』はリアリティ・ショックの体験やメンタルヘルス不調と関連する」ことを明らかにした[5)]。

一方、保育者の早期離職問題については2007年以降から注目されるようになった。とくに保育士養成協議会が2009年に実施した大規模調査は早期離職問題の実態を浮き彫りにし、それ以降に発表された多くの研究調査で、卒後2年目までの離職率が2割前後であることが判明した[注3)]。また、離職率は卒後1年目が一番高いとする結果もあり[6)]、20%の保育現場に1年未満の離職者がいたことから[7)]、就職後1年目から離職を防ぐための試みが必要である」と指摘している[8)]。厚生労働省の調査においても、2017年時点の離職率が9.3%（うち公営5.3%、私営10.7%）であり、1年以内に1割程度の離職が常態化している[9)]。さらに、保育所で勤務する保育士の経験年数（常勤のみ）をみると（表1）、8年未満の保育士が約半数（49.4%）を占めており、保育士の定着についても課題がある[9)]。

文部科学省の報告から、幼稚園教諭の離職率については30歳未満の離職率が6割以上を占めており、小学校教員が1割未満であるのに対し多くなっている。平均勤続年数を比べても小学校教員が約17年であるのに対し、幼稚園教諭は約7年と短くなっている[10)]。このような状況から、幼稚園教諭についても保育士と同様に離職防止と定着促進が必要であるといえる。

以上のことから、教育・保育者養成校にとって早期離職防止は全国共通の課題であることがわかる。

表1　保育所で勤務する保育士の経験年数（常勤のみ）

	2年未満	2～4年未満	4～6年未満	6～8年未満	8～10年未満	10～12年未満	12～14年未満	14年以上
全体	15.5%	13.3%	11.1%	9.5%	7.9%	6.7%	5.8%	30.1%
うち公営	10.8%	10.3%	9.4%	8.0%	6.8%	6.1%	6.0%	42.7%
うち私営	17.9%	14.9%	12.0%	10.2%	8.5%	7.1%	5.8%	23.6%

出所：文献9)，p.23より作成

2. リアリティ・ショック

まず、リアリティ・ショックの概念を整理しておく。表2のとおり、Hall（1976）[11]の「高い期待と実際の職務での失望させるような経験との衝突」、Schein（1978）[12]の「個人が仕事に就く際の期待・現実感のギャップ」、Dean（1983）[13]の「組織に参加する前に形成された期待と正式な組織構成員となった後の個人の認識の間の相違」、Dean, Ferris and Konstans（1988）[14]の「個人の組織構成員になる前の期待と組織の構成員になったあとに形成された期待の間に生じる不一致」などが、リアリティ・ショックの定義として示されている。

また、松浦によれば、看護分野では1986年に雑誌『看護展望』でリアリティ・ショックが特集されたことを機にリアリティ・ショック研究が行われるようになったという[15]。その際、最も多く用いられたのがKramer（1974）[16]の定義である。Kramerはリアリティ・ショックを「新卒の専門職者が就職後数か月以内に予期しなかった苦痛や不快さを伴う現実に出くわし、身体的、心理的、社会的なショック症状を表わす状態」とした。そして、その後のリアリティ・ショックに関する論文は2000年前後で急増し、さらに2007年にもピークがみられ、その後は一定数の研究がなされてきた[17]。

その一方で、松浦らは保育分野におけるリアリティ・ショックの定義を「『就職前の予想と就職後の現実のギャップ』がストレッサーとなり、ストレスが喚起された状態」とし、新人保育士のリアリティ・ショックを引き起こす予想と現実のギャップの抽出を試みた[2]。それによると、「労働負荷の大きさ」「ストレス対処やサポート獲得の難しさ」「子どもと関わる難しさ」「保護者と関わる難しさ」「自分の能力不足の実感」がネガティブなギャップ

表２　リアリティ・ショックの概念整理

研究者	定義	与える影響
Kramer　（1974）	新卒の専門職者が就職後数か月以内に予期しなかった苦痛や不快さを伴う現実に出くわし、身体的、心理的、社会的なショック症状を表す状態	
Hall　（1976）	高い期待と実際の職務での失望させるような経験との衝突	未使用の潜在能力症候（syndrome of unused potential）を引き起こす
Schein　（1978）	個人が仕事に就く際の期待・現実感のギャップ	・可能性の高い新人の辞職 ・モチベーションの喪失と自己満足の学修 ・キャリア初期に能力不足な部分を発見し損なう ・キャリア後期に必要となるものと違う価値および態度の学修
Dean　（1983）	組織に参加する前に形成された期待と正式な組織構成員となった後の個人の認識の間の相違	コミットメントの変化
宗像（1986）	実際に職場で仕事を始めるようになって予期せぬ苦痛や不快さを伴う現実に出くわして、身体的・心理的・社会的にさまざまなショック症状を表す現象	
Dean, Ferris and Konstans　（1988）	個人の組織構成員になる前の期待と組織の構成員になった後に形成された機体の間に生じる不一致	・社会科過程の失敗 ・コミットメントの低下

出所：尾形真実哉．リアリティ・ショック（reality shock）の概念整理．甲南経営研究，2012, vol. 53 , no. 1, p. 85-126．および文献15)，p. 67．より作成

として挙げられる。加えて、「子どもと関わる難しさ」「保護者と関わる難しさ」「自分の能力不足の実感」は専門職の知識と力量が問われるものであり、そこにギャップが生じている[2)]。

さらに、上記と関連して養成校時代に生じる4年制大学特有のリアリティ・ショックがある。本学においてそれは、初めて経験する3年次科目である「保育実習Ⅰ」で、短期大学生や専門学校生と一緒に実習を行うことで生じる。4年制大学の教員・保育者養成課程では、4年間を十分に活用し、段階を追って広く、深く技術力や専門性を高められるよう科目配置等工夫し編成されている。そのため、2年制の養成課程での2年次生と4年制養成課程の3年次生で実施される最初の実習である「保育実習Ⅰ」では、現場で求められるとくに即戦力の分野において差が生じてしまう傾向がみられる。

厚生労働省[19)]によると、「実習態度」「園・施設の役割・子どもの理解」「保育内容・環境」の項目で、「保育実習Ⅰ（保育所）において身についた」と回答した者の割合は、4年制大学生よりも短期大学生や専門学校生のほうが高い。しかし、実習を重ねるうちに4年制大学生の専門性や技術力の高さは短期大学生や専門学校生に引けを取らない結果となっている。調査結果からも「保育実習Ⅱ」あるいは「保育実習Ⅲ」の実習において、「実習のねらいや目標を明確に意識できる」の割合は、短期大学生・専門学校生が15.7%であるのに対し、4年制大学生は18.3%を示している。また、「自らの実習課題を明確に意識できる」の割合についても、短期大学生・専門学校生が17.7%であるのに対し、4年制大学生は19.7%と短期大学生・専門学校生よりも上回っている[18)]。

そのため、早期に職業意識の定着や動機づけをもたせる実践的な学びを経験し、本実習のモチベーションにつなげることで、4年制大学特有のリアリティ・ショックを含め、早期離職を誘発するリアリティ・ショックの防止あるいは低減が可能だと考える。

早期体験実習

1．保健医療専門職教育における早期体験実習

竹鼻らによると、早期体験実習は文部科学省が医学教育等の改善や充実と、医療技術者の養成を目指すために、1995年にカリキュラムの改善を試みたことで始まったという[19)]。早期体験実習は「アーリー・エクスポージャー（early exposure）」とも呼ばれ、各大学の医学部や薬学部で先駆的に取り組まれている。以下に主な事例を挙げる。

近畿大学薬学部医療薬学科の早期体験実習は医療に関連した多彩な体験機会を設けている[20)]。また、慶応義塾大学医学部では1年次に夏季休暇期間中の1週間、老人医療施設や重症心身障害児施設、リハビリテーション施設などで「介護者の見習い」としての実習を行っている[21)]。札幌医科大学医学部でも地域の医療体制や健康課題などについて、住民と交流する「地域滞在実習」を早期体験実習として実施している。また、同大学の特徴として、医療に限らず広く社会に目を向けてもらう機会を設けている点は興味深い。具体的には、外来患者の案内や支援、入院患者向けの移動図書館の運営などの活動を行っている。さらに、2014年からは「刑務所見学」を導入し、「普段は目にしない社会の一端に触れることにより、さまざまな物事を考える契機、ヒントになる」機会を設けている[22)]。これらに共通する早期体験実習の目的は、「医学や看護教育において学生が入学後の早期の段階で、病院等の医療の現場で介護体験実習等の直接的体験を通じて、医師や看護師等を目指す動機付けや使命感を体得させること」である[19)]。

次に早期体験実習の教育的効果について整理する。前述したように、保健医療専門職教育における早期体験実習は1995年のカリキュラム改善を機に、積極的に取り入れられている。1995年から2022年までの早期体験実習に関する論文の検索結果は8,000件以上であった。そのうち教育的効果に関する論文については230件以上ある[注4)]。ここ

ではそれらの中から最近の研究の主な教育効果について取り上げる。田邉らは重症心身障害児（者）医療をテーマに、医学生や研修医における重症児（者）医療の早期体験実習を行うことで、重症児（者）医療への理解の有効性を考察した。その結果、1時間という短時間の実習でも半日～1週間の早期体験実習と同様の効果が認められるとし、短時間であれば多くの施設で実施できる可能性があることを示唆した[23]。また、山根らは障害者支援施設体験実習における歯学部学生の学修効果について検証した。それによると、多くの実習生に障害者観の形成から障害は個性という認識がみられたという[24]。さらに、藤岡らは母児との触れ合い体験をとおして、看護大学生の母性意識に与える効果検証を行った。その結果、田邉らの研究成果と同様に、短時間でも触れ合いや行動観察、遊ぶという経験をとおして効果があったと述べている[25]。

以上のように、保健医療専門職教育において実施されている各種早期体験実習について教育的効果が立証されている。教育・保育者養成校においても保健医療専門職教育同様対人援助の専門職を養成する教育を展開しており、早期体験実習の実施による教育的効果が期待できると考える。

2. 教育・保育分野における早期体験実習

教育・保育分野における早期体験実習の実施事例を2件挙げる。1件目は、椙山女学園大学教育学部子ども発達学科である。ここでは、早期体験実習を「ふれあい実習」と称し、1年次前期に保育所・認定こども園・幼稚園・小学校等の現場で、子どもたちの様子や、授業あるいは保育の観察実習を行う。観察後は実習生が実習ノートを基に指導法を考察し、学年やクラス、科目の特性により異なる授業方法に気づくような討論会を実施している。また、1年次後期はボランティアの立場で教育や保育の場を経験する。実習前はボランティア活動に不可欠な知識や技能、マナーの修得などを基礎学習として行う。そして、実習後は各自の経験をレポーティングして発表し、実習生同士でその成果を共有し合うという実施方法である[26]。

2件目は、越谷保育専門学校で、ここでは早期体験実習として、1年次前期に6つの附属幼稚園で保育現場を体験する。実習をとおして、子どもたちと触れ合うことで保育者への動機づけを高める。また、部分実習指導案の作成、実習記録の記入、ふり返りなど実践的かつ専門的な知識や技能等を学ぶとともに、保育者を目指す学生としての自覚、学習意欲につなげることを目的としている[27]。

本学が所有する子育て総合支援施設「KIT」を活用した早期体験実習プログラム[注5)]

以上から、教育者や保育者の早期離職問題と、4年制大学特有のリアリティ・ショックを防止するべく、入学時の早い段階から職業意識の定着と動機づけをもたせる仕組みが必要だと考えた。そこで、保健医療専門職教育で取り組まれている「早期体験実習」を参考に、教育・保育分野でその教育的効果を明らかにする研究に着手することにした。国内外の動向をみると、教育・保育分野ではこれまで早期体験実習のようなことを意識し、実践的に取り組む大学はあるが、早期体験実習がもたらす効果まで検証を論じた先行研究はほとんど見当たらない[注1)]。本稿では第一段階として早期体験実習プログラム（以下、本プログラム）の開発について報告する。文献検討にもとづき作成した早期体験実習のプログラムを図1に示す。本プログラムは本学が所有する子育て総合支援施設「KIT」を活用し設計しており、2020年度より実施を試みている。以下、本プログラムの開発内容および実施方法について報告する。なお、本学部は「教員養成コース」と「保育者養成コース」の2コース制[注6)]を設けており、本プログラムは各コースの目的対象に合わせ設計している。

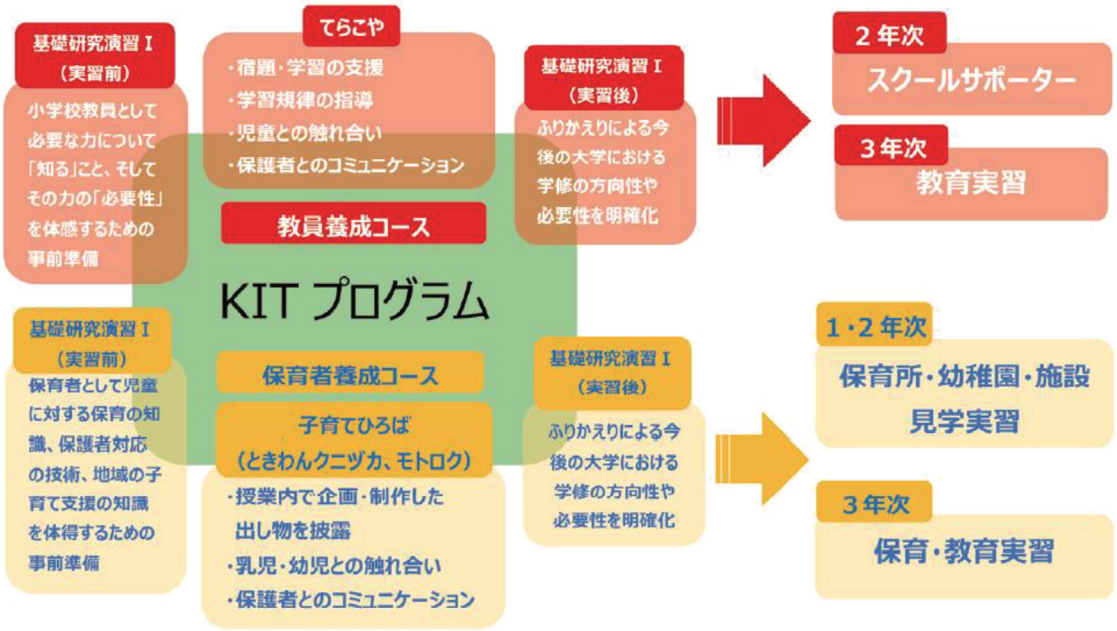

図１　神戸常盤大学教育学部こども教育学科の早期体験実習

1．教員養成コース

1）実習目的

・KIT を利用する児童への宿題等の学習支援を行い、指導力の基礎・基本を身につける。

・児童と遊びや会話をとおして触れ合うことで、児童理解力の基礎・基本を身につける。

・KIT を利用する児童の保護者と会話をし、保護者とコミュニケーションを図る力の基礎・基本を身につける。

・児童と実際に関わることで、自己の適性について把握する。

・実習を振り返り、今後の自己の目標をもつ。

上記５点を実習の目的としている。これらの基礎的な知識や技能は、KIT 実習のみで身に付くものではなく、２年次以降のスクールサポーターや各種のボランティア、３年次の教育実習等で深めていくものである。１年次の段階では、小学校教員として必要な力について「知る」こと、そしてその力の「必要性」を体感することをとおして、今後の大学における学修の方向性や必要性を明確にすることが最終の目標である。

2）実習場所

本学が所有する子育て総合支援施設「KIT」内の「てらこや」で実施する。

3）実習内容

・宿題や学習の支援：考え方を指導したり、音読練習や漢字練習などのサポートを行ったりする。

・学習規律の指導：時間を守る、宿題を先にする、KIT 内のルールを守るなどを指導する。

・児童との触れ合い：カードゲームなどで児童と遊び、児童と関わりを深める。

・保護者とのコミュニケーション：お迎えに来た保護者に連絡事項や感想を伝えることをとおして、保護者と会話を行う。

これらの実習内容は、教師における指導の基礎・基本の力である。とくに保護者とのコミュニケーションは、スクールサポーターや教育実習においてもほとんど体験できないものである。学生にとっては、保護者という立場や年齢の異なる人とコミュニケーションを図るという貴重な機会である。

2. 保育者養成コース

1）実習目的

KIT の仕組みや機能を理解し、将来目指す保育者像を具体的にイメージする。

2）実習場所

KIT の子育てひろばとして新長田にある「ときわんクニヅカ」と、元町にある「ときわんモトロク」で実施する。

3）実習内容

授業内でペープサートやエプロンシアターなど出し物を企画・制作し、実習日に実践する。さらに、子どもだけでなく保護者を含めた親子交流を意識して実習に臨む。

4）実習期間

実習期間中に 1 日、午前の部（10:00 ～ 12:00）、午後の部（14:00 ～ 16:00）のどちらかを担当する。

写真 1・2 は 2020 年度に実施した実習の様子である。また、2021 年度は前年度の見直しから本プログラムの改良を図り、新たに実習生のピア評価の導入を試みた。具体的には、「3）実習内容」に、授業内に企画・制作した出し物を実習生同士でまず実践し合い、お互いに改善点を挙げ、実習日までによりよい実践内容に仕上げるという取り組みを追加した。

写真 1　実習風景（ときわんモトロク）

写真 2　実習風景（ときわんクニヅカ）

教育・保育分野における早期実習体験に関する今後の展望と研究上の課題

本稿において検討した教育・保育分野における早期実習体験は、本学が所有する子育て総合支援施設「KIT」で実習を行うという強みがある。早期体験実習に取り組む養成校の多くは、近隣の保育所や幼稚園、認定こども園など関連施設での実施であり、どうしても当該施設での教育方針に沿った実習プログラムになってしまう。しかし、KIT は本学独自の施設ということもあり、体験実習の内容を自由にカスタマイズできる上に、専属のスタッフが常駐しており、実習生が適切なフィードバックを得やすい環境にある。さらに、KIT では保護者や地域の人と関わることができる。これは、教育実習や保育実習では得られにくい体験である。そのため、KIT という本学独自の施設で、保護者や地域の人と関わりながら、教育実習や保育実習では得られにくい体験をとおして、実習生がフィードバックを得やすい環境をつくることが今後の実習上の課題である。

一方、研究上の課題としては、本研究は保健医療専門職教育で取り組まれている「早期体験実習」を参考に、教育・保育分野でその教育的効果の測定が挙げられる。測定を通して早期体験実習を実施することでみられる学生の資質向上について明らかにしていくことを次の課題としたい。

謝辞

本研究に協力していただいたすべての学生たちに深謝致します。

本研究は、2020年度および2021年度の本学テーマ別研究の助成を受けたものです。

注

注1）小林稔、遠藤洋志、岩田昌太郎が科学研究費助成事業で、2012年から2015年に「教員養成教育におけるアーリー・エクスポージャーに関する介入効果検証」という研究を行っている。

注2）大学の授業とは、本学教育学部こども教育学科カリキュラムの1年次開講科目「基礎研究演習Ⅰ」であり、大学の事業とは、本学が所有する子育て総合支援施設「KIT」を中心に展開している地域子育て支援事業を指す。

注3）全国規模の調査として、一般社団法人全国保育士養成協議会専門委員会．指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向および業務の実態に関する調査報告書Ⅰ．保育士養成資料集．2009, no. 50, p. 246-327が代表的である。また、卒後2年目の離職率を調査した研究として、岡本和惠，卜田真一郎，松井玲子，北野圭子．本学卒業生の幼稚園・保育所等における早期離職の現状と課題―平成19・20年度卒業生を対象として―．常磐会短期大学紀要．2010, vol.39, p. 19-39、上田厚作，松本昌治．新任保育者の早期離職を防ぐために保育者養成校に求められる就職支援活動―離職率・離職原因等に関する追跡調査結果を受けて―．越谷保育専門学校研究紀要．2015, no. 4, p. 29-34、横山博之，重松由佳子，増渕千保美，柴田賢一．保育者の早期離職における課題―保育者の確保と保育の質の向上を求めて―．次世代育成研究・児やらい．2016, vol. 13, p. 29-51を参照されたい。

注4）Google Scholarで1995年～2022年までの期間を指定し、「早期体験実習」および「早期体験実習 効果」をキーワードに検索しヒットした件数である。

注5）「KIT」は、地域子育て支援事業の一環で2018年に組織された子育て総合支援施設である。「子育て支援」について、神戸市長田区を対象に本学の専門性（教育・保健医療）を駆使してその解決策を講じ、地域のソーシャルキャピタルを発掘、強化するために、本学と地域が一体となって取り組む「地域子育てプラットホーム」である。同施設は小学児童を対象に学習支援を行う「てらこや」、未就学児を対象に子育てひろばの機能をもつ「ときわんクニヅカ」、地域住民を対象にサテライトセンターの機能をもつ「コティエ」の3つのゾーンが一緒になって、アスタくにづかに位置する。また、元町商店街6丁目にも「ときわんクニヅカ」と同じ子育てひろばの機能をもつ関連施設「ときわんモトロク」がある。さらに、2021年には神戸市御崎公園球技場のなかに小中学生を対象に学習支援を行う「てらこやノエスタ」、子育てひろばの「ときわんノエスタ」が開室された。

注6）教員養成コースは主に小学校教員の養成として、「小学校教諭一種免許状」や「幼稚園教諭一種免許状」、「社会福祉主事任用資格」を取得するコースである。保育者養成コースは主に保育士、幼稚園教諭の養成として、「保育士資格」や「幼稚園教諭一種免許状」、「社会福祉主事任用資格」を取得するコースである。

文献

1）内田豊海，松崎康弘．保育・教育現場における早期離職の原因とその後　短大卒業生の事例をもとに．南九州地域科学研究所所報．2016, no. 32，p.17-23.

2）松浦美晴，上地玲子，岡本響子，皆川順，岩永誠．新人保育士のリアリティショックを引き

起こす予想と現実のギャップの抽出―カテゴリーと分類軸―．保育学研究．2019，vol. 57，no. 1，p. 79-89.

3）文部科学省．学校教員統計調査／令和元年度 第１部 高等学校以下の学校及び専修学校、各学校の部 教員異動調査 小学校．学校基本統計調査．2021-3-25．https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400003&tstat=000001016172&cycle=0&tclass1=000001152450&tclass2=000001152451&tclass3=000001152453&tclass4=000001152456&cycle_facet=tclass1%3Atclass2&tclass5val=0,（参照 2022-8-22）.

4）小橋繁男．小中学校教師のストレスとバーンアウト、離職意思との関係．日本保健科学学会誌． 2013, vol. 15, no. 4, p. 240-259.

5）松永美希，古谷嘉一郎，中村奈々子，三浦正江．新任教師の完璧主義傾向とリアリティ・ショックおよびメンタルヘルスとの関連．日本健康心理学会大会発表論文集．2019, vol. 32, p. 127.

6）横山 博之，重松由佳子，増淵千保美，柴田賢一．保育者の早期離職における課題：保育者の確保と保育の質の向上を求めて．児やらい．尚絅子育て研究センター（運営委員会）編．2016，vol. 13，p.29-51.

7）加藤光良，鈴木久美子．新卒保育者の早期離職問題に関する研究（1）幼稚園・保育所・施設を対象とした調査から．常葉学園短期大学紀要，2011，vol. 42，p. 79-94.

8）木曽陽子．保育者の早期離職に関する研究の動向：早期離職の実態、要因、防止策に着目して．社会問題研究．2018, vol. 67, p. 11-22.

9）厚生労働省．保育士の現状と主な取組．保育の現場・職業の魅力向上検討会（第５回），参考資料１． 2020-8-24,86p.

10）文部科学省．幼児教育の質の向上について（中間報告）．2020-5-26, 24p.

11）Hall, D. T. Careers in Organizations, Goodyear Publishing. 1976.

12）Schein, E. H. Career Dynamics: Matching Individual and Organizational Needs,Addison-Wesley. 1978.

13）Dean, R. A. Reality shock: The link between socialisation and organizational commitment. Journal of Management Development, 1983, vol. 2, p.55-65.

14）Dean, R. A.; Ferris, K. R.; Konstans, C. Occupational reality shock and organizational commitment: evidence from the accounting profession. Accounting Organizations and Society, 1988, vol. 13, No. 3, p. 235-250.

15）松浦美晴．過去５年間のリアリティ・ショック研究におけるリアリティ・ショックの概念定義と捉える手法．山陽論叢．2018, vol. 24, p. 67-74.

16）Kramer, M. Reality Shock: Why Nurses Leave Nursing? The C. V. Mosby Co. 1974.

17）松浦美晴，上地玲子．報告 保育士を対象とした「リアリティ・ショック対応研修会」．山陽論叢．2019, vol. 25, p. 123-137.

18）厚生労働省．保育実習の効果的な実施方法に関する調査研究 研究報告書．平成 29 年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業．2017,263p.

19）竹鼻ゆかり，神山雅美，山田有希子，中村陽子，八木亜弥子，山崎奈美．養護教諭養成課程における早期体験学習としての幼稚園での保健教育の実践と評価．東京学芸大学紀要．2021, vol. 73, p. 291-299.

20）近畿大学薬学部医療薬学科．“アーリーエクスポージャープログラム”．近畿大学，https://www.kindai.ac.jp/pharmacy/research-and-education/pickup/early-experience/,（参照 2022-7-30）.

21）慶應義塾大学医学部・医学研究科．“EEP (Early Exposure Program)”．慶応義塾大学．https://www.med.keio.ac.jp/education/

undergraduate/eep.html,（参照 2022-7-30）.

22）札幌医科大学医学部．“臨床実習 72 週、充実に向け多彩な“仕掛け”．札幌医科大学．https://www.m3.com/news/open/iryoishin/623287,（参照 2022-7-30）.

23）田邉良，石井光子．重症心身障害児（者）とのふれあいに重きを置いた医学生への早期体験実習の効果検討．日本重症心身障害学会誌．2018, vol. 43, no. 2, p. 291.

24）山根尚弥，毛利泰士，中島好明，安藤早礎，藤代千晶，村上旬平，秋山茂久．早期体験実習としての障害者支援施設見学での歯学部学生の学び．日本障害者歯科学会雑誌．2019, vol. 40, no. 1, p. 72-79.

25）藤岡奈美，服部佳代子，畠知華子．学内での短時間の母児との触れ合い体験による看護大学生の母性意識発達への効果．活水論文集 看護学部編．2021, vol. 7, p. 2-9.

26）椙山女学園大学．“1 年次からの実習体験 ”．https://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/academics/edu/child/practical/,（参照 2022-7-30）.

27）越谷保育専門学校．“今年度も実習体験が始まりました！”．https://www.koshigaya-hoiku.ac.jp/event/?p=1340,（参照 2022-7-30）.